熊野信仰

獅子舞と修験と

平成三十年度 市史編さんシンポジウム

1日目：10月20日（土）
13：30～16：30

2日目：10月21日（日）
8：50～12：00

長井の伝統芸能である黒獅子がどのように生まれ、今日までどのように伝えられてきたのか――。
その発生・伝承、そこに込められた思いと願いを民俗学と歴史学のふたつの視点から明らかにしていく。

プログラム

1日目

●13：30～ 開会

●13：45～
基調講演「黒獅子と修験芸能」
菊池和博 氏（東北文教大学）

●14：55～
報告①「熊野信仰の変遷」
原 淳一郎 氏（米沢女子短期大学）

●15：35～
報告②「置賜の獅子頭の変遷」
渋谷正斗 氏（獅子頭研究家）

2日目

●8：50～
報告③「伊達氏と熊野信仰」
落合義明 氏（大東文化大学）

●9：30～
報告④「東北地方の熊野信仰と獅子頭」
小谷竜介 氏（東北歴史博物館）

●10：20～
報告⑤「出獅子と神事」
安部義彦 氏（長井市史編纂委員）

●11：10～
パネルディスカッション「黒獅子のルーツと祈り」
コーディネーター 伊藤清郎 氏（山形大学名誉教授）

※内容は当日変更になる場合があります。

主催：長井市／長井市教育委員会
後援：総務省
会場：タスパークホテル 2F ホール
山形県長井市館町北6－27
定員：200名（要事前申込）
申込／お問い合わせ
長井市教育委員会文化生涯学習課
TEL 0238－84－7677

入場無料

beyond2020 プログラムは、多様性や国際性に配慮した文化活動・事業を政府が認証し、日本文化の魅力を国内外に発信する取組です。長井市は この取組を応援しています。

beyond 2020

シンポジウム概要

長井市を中心とする置賜地方の神社には獅子頭が祀られ、祭礼の日に獅子舞がまちなかを練り歩き、祭りはクライマックスを迎えます。長井の獅子舞は「多人数獅子」、または「百足獅子（むかでじし）」といわれ、幕の中に多くの人が入り込み、多足の動くさまが百足（ムカデ）を連想させることからこう呼ばれています。また、獅子頭が黒一色に塗られていることから「黒獅子」とよばれ、長井の獅子舞を特徴づけています。

黒獅子芸能を発生・伝承・構造の観点から分析を行い、熊野修験や熊野詣などの山岳・民間信仰、そして戦国武将との関わりを中心に講演・パネルディスカッションを行います。また獅子舞に携わる地元有識者も講師に招き、出獅子における神事や獅子頭の変遷などを交えながら、黒獅子と熊野信仰の関わりについてみなさんと考え、黒獅子に寄せる人々の思いや願いに迫ります。

講師略歴

菊池和博（きくちかずひろ）氏
東北文教大学短期大学部総合文化学科特任教授。昭和24年生、山形県出身。民俗学・民俗芸能論が専門。長井市史編集委員。

原 淳一郎（はらじゅんいちろう）氏
山形県立米沢女子短期大学准教授。昭和49年生、神奈川県出身。近世日本の山岳信仰・寺社参拝史、近代日本史が専門。長井市史編集委員。

渋谷正斗（しぶやまさと）氏
獅子頭研究家。蕎麦店「獅子宿」経営者。昭和33年生、山形県出身。獅子頭彫師。獅子頭の収集・研究に取り組む。

落合義明（おちあいよしあき）氏
大東文化大学文学部歴史文化学科准教授。昭和42年生、埼玉県出身。日本中世史が専門。長井市史編集委員。

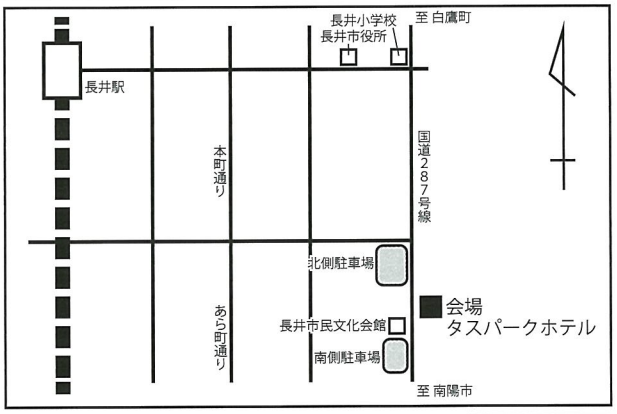
小谷竜介（こだにりゅうすけ）氏
東北歴史博物館副主任研究員。昭和45年生、東京都出身。日本民俗学（民俗芸能、工芸技術）が専門。

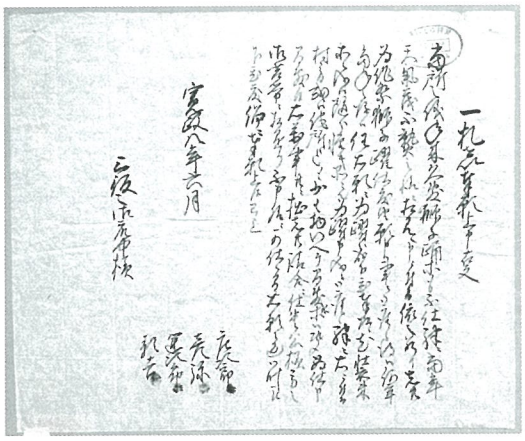
安部義彦（あべよしひこ）氏
長井市文化財保護協会顧問。昭和13年生、山形県出身。近世・近代の地域史が専門。長井一の宮である總宮神社の前神職でもある。長井市史編纂委員。

伊藤清郎（いとうきよお）氏
山形大学名誉教授。昭和23年生、宮城県出身。中世における宗教史、武家社会が専門。特に最上義光に関する研究が多い。長井市史編纂委員長。

会場案内

会場：タスパークホテル２階ホール
住所／山形県長井市館町北６－２７
電話／０２３８－８８－１８３３
フラワー長井線長井駅より徒歩20分
お車でお越しの場合は、ホテル駐車場又は長井市民文化会館北側・南側駐車場に駐車してください。
会場内はバリアフリーですが、席のご案内などお手伝いが必要な場合は、申込時にお伝えください。





表面の資料紹介

村役宛獅子踊願状 - 寺泉村 -（文教の杜ながい所蔵）

この願状は寛政８年（1796）６月、下寺泉村の若者頭であったと思われる４名から村方役へ出されたものです。「最近久しく当村では獅子踊り（獅子舞）が行われていない。今年は天候も不順で作柄が思わしくないので、豊作祈願として若者共が獅子踊りを行いたいと願っている。装束は簡単なものとし、ご迷惑をおかけ致しませんので代官所へお届けいただきたい。」との内容です。当時から、獅子舞は人々の生活の中心であり、重要視されていたことが読み取れます。

このシンポジウムは、全国モーターボート競走施行者協議会からの拠出金を受けて実施するものです。